

# 大東市域の支城 一野崎城跡・龍間城跡・三箇城跡一

李 聖子（大東市）

## はじめに

飯盛城跡は大阪府の北東部、四條畷市と大東市にまたがる飯盛山の山頂に築かれた中世の山城跡です。城域は東西400m、南北700mを測り西日本有数の規模を誇ります（28頁飯盛城跡赤色立体地図）。また、本格的な石垣が取り入れられた山城跡としても有名です。

飯盛城が機能していた当時、周囲には飯盛城を守るために多くの支城が築かれました。支城の機能を有したとみられる城には、飯盛城の東を守る狼煙台としての機能が推定される南野砦、長谷遺跡（四條畷市）の北西に存在した可能性のある権現山砦、西には深野池に存在した三箇の島に築かれた三箇城、東には大和への街道沿いを抑える田原城、北田原城（生駒市）、南方を守る野崎城、龍間城、北方を守る忍岡古墳を城郭化した岡山城、土砂採取で消滅した清滝山に存在したとされる清滝城、現在は龍尾寺が建つ茶臼山砦が挙げられます。今回の講演会では、これらの飯盛城を支えるために築かれたお城＝支城を取り上げます。

## 1. 大東市域の支城跡

大東市域にある支城跡は野崎城跡、龍間城跡、三箇城跡の三か所です。野崎城跡と龍間城跡は飯盛城跡の南方の山中に築かれていますが、三箇城跡のみ飯盛城跡の西にかつて存在した深野池の三箇の島に築かれています。

野崎城跡は近年のハイキング道の整備により地形が改変されているものの、城郭遺構を確認することができます。龍間城跡は山中に良好な状態で城郭遺構が残されており、東側に位置する大阪桐蔭グラウンド建設工事の際に発見された出土遺物から城の性格を推定することができます。三箇城跡については文献から様子をうかがうことはできますが、残念ながら遺構が発見されていないため城跡の詳細な位置などは明らかになっていません。

## 2. 野崎城跡

飯盛城跡の南西方約1km、飯盛山から南西に伸びる尾根に位置する標高約114mの八幡山の山頂に築かれており、城域は東西約200m、南北約220mを測ります。赤色立体地図を見ると、北側には谷田川が西に向かって流下し、山頂に主郭に相当する曲輪（写真1）が築かれています。主郭の南東斜面下には堀切（写真2）が構えら



写真1 野崎城跡 主郭（南から）

れており、この堀切は飯盛山へ至るハイキングコース（南尾根コース）が通っています。主郭から北にのびる尾根Aと南にのびる尾根Bには削平はあまいものの、曲輪状の平坦面が確認できます。尾根Aと尾根Cの間の谷には帯曲輪が配されています。尾根Cと主尾根から北西方向にのびる尾根Dにも曲輪状の削平地を確認することができます（写真3）。

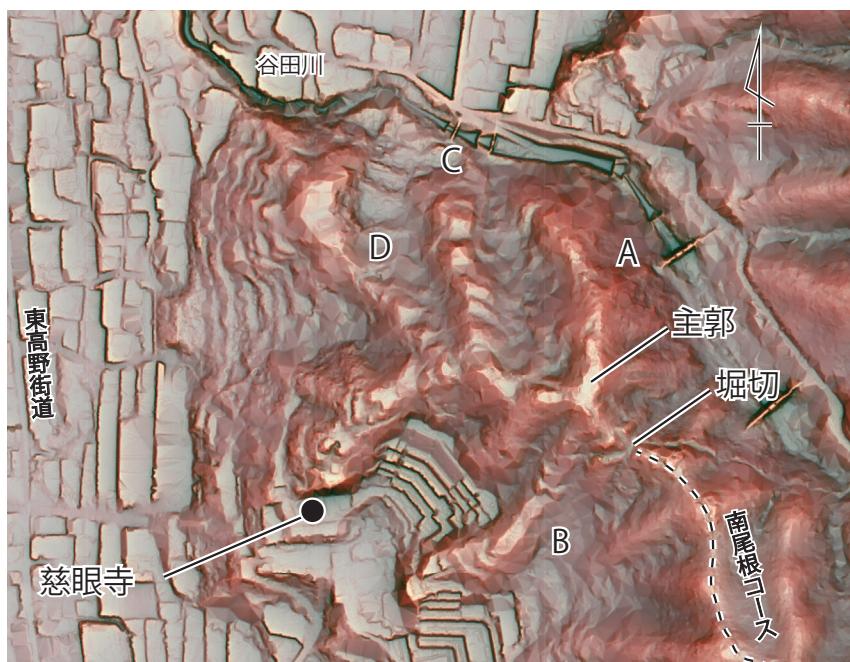


図1 野崎城跡 赤色立体地図（1/2500）

主郭の西側の主尾根には階段状に曲輪が配置され、さらに西の慈眼寺（野崎観音）に向かって削平地が続きますが、平成17年に整備された休憩所やハイキング道の整備によって地形が大幅に改変されているため城郭遺構であったかはわかりません。

野崎城跡の遺構の配置を改めてみてみま

しょう。主郭の南東に堀切を構えて、この堀切より西の尾根Aと尾根Bにさらに曲輪を配置することで城より東側の侵入を防いでいると考えられます。また、尾根Aの曲輪は尾根C、尾根Dと合わせて北側の谷筋沿いの侵入を防ぐ役割をも担っていたと推定されます。また主尾根の南西端には慈眼寺が東高野街道に面して位置しており、城と一体となって東高野街道と城の南側の防御を担っていた可能性が指摘できます。ただし、詳細な現地踏査を行っていないため、今後の調査によって城の構造を解明する必要があります。

野崎城の築城者や築城時期は明らかになっていませんが、文献からすくなくとも15世紀には成立していたと考えられます。現在、野崎城跡からは龍間城跡を通って飯盛城跡へ至るハイキングコースが通っています。このことから飯盛城が機能していた時代には野崎城は本城である飯盛城の南方防御の一拠点として機能していたと考えられます。

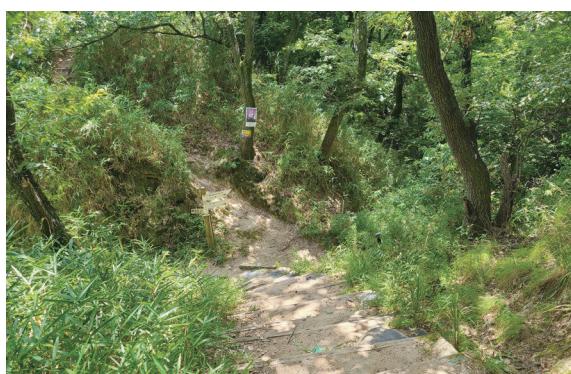


写真2 野崎城跡 堀切（北西から）



写真3 野崎城跡 尾根B曲輪状削平地(北東から)

### 3. 龍間城跡

飯盛城跡の南方約500mに位置する標高294mの山頂を中心に築かれており、城域は東西約50m、南北約80mを測ります。山頂に主郭に相当する曲輪を築き、そこを中心に放射状に曲輪を配置しています。曲輪は尾根上に構えられており、自然地形を利用して造成したものと考えられ、確認できる城郭遺構は曲輪と土塁のみです。土塁は主郭に築かれており、土塁が途切れる箇所は曲輪への出入口と

考えられます。龍間城跡で発掘調査は行われていませんが、城跡の南東側山麓に位置する大阪桐蔭高等学校の野球グラウンドの造成時に行った発掘調査では、15～16世紀前半の土師器皿・羽釜・瓦質土器火鉢・瀬戸美濃焼の皿などの土器や陶磁器が出土しています。出土地点から龍間城跡までの間で城郭遺構は確認されなかったため、山麓に居館などの城郭関連施設があり、それに関連する資料と推定されます。

龍間城跡はその規模から在地土豪の城として、木沢長政が飯盛城を居城とした時期（天文5年[1536]～12年[1543]）に築かれ、飯盛城南方の拠点として機能していたと見られます。三好長慶が飯盛城に入城した永禄3年（1560）にも南方防衛の一拠点として再利用され、飯盛城が城郭としての機能を失う永禄12年（1569）頃に廃城となったと考えられます。



写真4 龍間城跡 主郭（南西から）

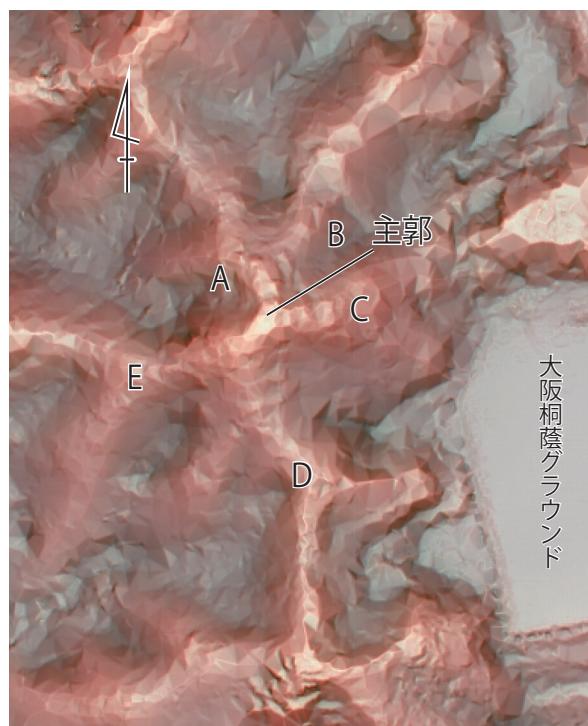


図2 龍間城跡 赤色立体地図 (1/2500)

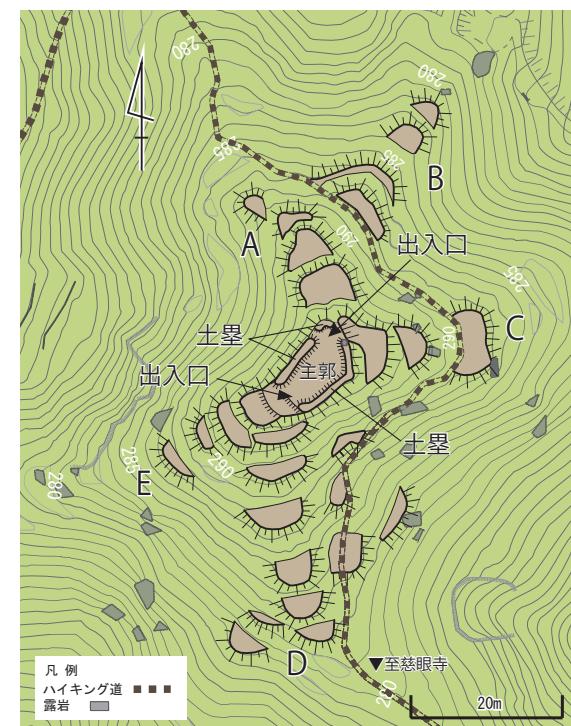


図3 龍間城跡 遺構図

#### 4. 三箇城跡

飯盛城跡の西方約2.5kmに三箇遺跡が位置しています。三好長慶に従った三箇頼照の城として文献に登場する三箇城ですが、詳細な位置や規模は不明です。現在、城が所在すると考えられる範囲は三箇遺跡として遺跡台帳に登録されています(図4)。

イエズス会宣教師ルイス・フロイスの『日本史』や残された書簡によると、三箇を治めていた三箇頼照は三好長慶に取立てられて飯盛城内に住居を構えていました。その前には『川沿いの堀に囲まれた小島』に家を有しており、これが三箇城にあたると考えられます。また、キリストンであった頼照は島に教会を建設していました。

現在の状況から島がどこにあったのか判断することはできず、三箇遺跡の中で行った発掘調査でも16世紀の遺物は発見されていません。三箇3丁目で行った道路工事に伴う発掘調査では近世の段状の遺構(写真5)が発見されたのみです。そこで、飯盛城が機能していた当時、三箇の島がどこにあったのか残された絵図と古地図から探ってみたいと思います。

三箇の島は大和川付け替えによる新田開発で深野池が開発される前の絵図にその位置が示されています(図5・図6)。正保国絵図系であるとみられる「摂津河内国絵図」(図5)では、深野池の中に島が3島描かれており、中央の島が一番大きな島であることがわかります。元禄に描かれた「河内国絵図」(図6)を見てみると、深野池には10の島が形成され、中垣内越(古堤街道)が通る箇所にひときわ大きな島が描かれ、三箇村の記述があります。この絵図からは、河川から深野池に流れ込む際に運ばれてくる土砂が様々な場所に堆積し、島を形成していることがわかります。また、両絵図とも島は池の西側に南北方向に多く形成されている様子が描かれています。これは南北から流れ込む河川が深野池の西端に集中しているため、このように島が形成されたものと考えられます。

「摂津河内国絵図」に描かれた村と街道、河川を明治20年に大日本帝国陸地測量部が作成した地図に記された地形や地名と照らし合わせて、深野池と新開池の一部のおおよその範囲を地図に転記しました(27頁 関連城郭と街道、旧深野池・新開池推定範囲)。そのうえで深野池の西側、島が形成されていた付近を確認すると、一番南側に「三箇村地」の記載があり、その北側には三箇村が位置しています(27頁)。一番北側の島の位置は地図から読み取る

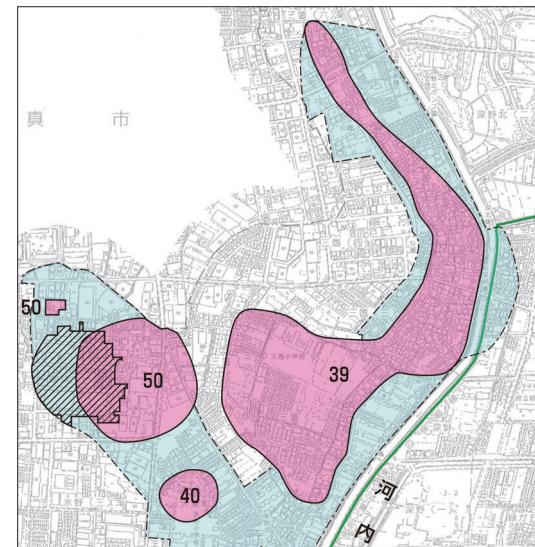


図4 39三箇遺跡(大東市埋蔵文化財分布図)



写真5 三箇遺跡 段状遺構(近世水田跡か)

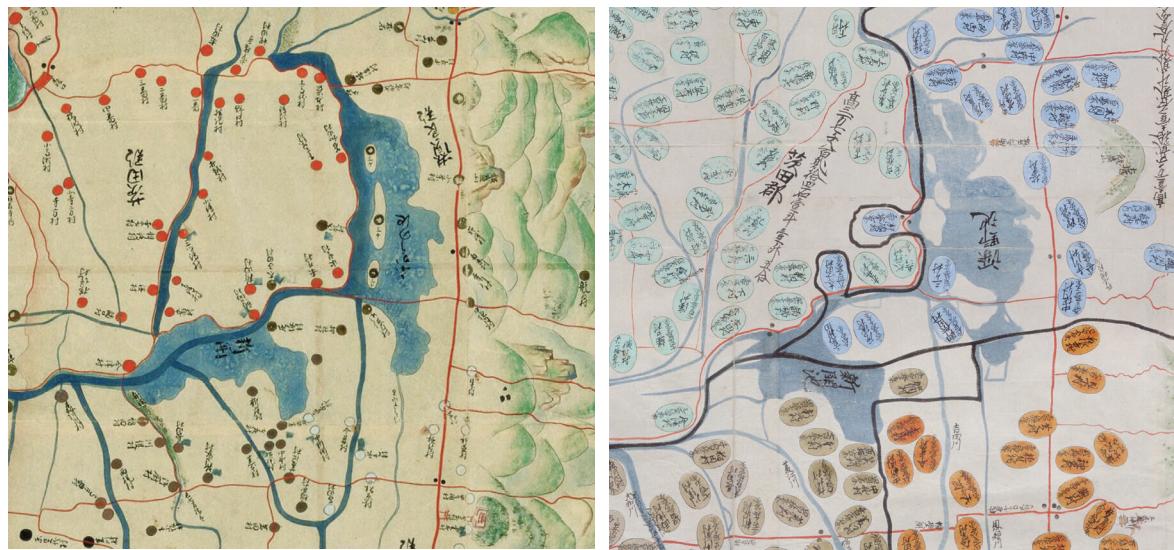


図5 摂津河内国絵図 深野池部分  
(国立国会図書館デジタルコレクションより)

図6 河内国絵図 (元禄) 深野池部分  
(国立公文書館デジタルアーカイブより)

ことはできません。地図に記載されている小字等は「河内国絵図」と合致する部分が多く近世の状況を反映しているとみられます。そのため中世の三箇の島の状況を読み取ることは困難です。また、二つの異なる時期に描かれた絵図を見比べてみても深野池に流れ込む土砂によって形成される島は時代によってさまざまに移り変わっていることから、時代によって村の中心が移動している可能性も考えられます。

現状では、発掘調査で三箇城に関する遺構や遺物は発見できていないため、まさに幻の城といえます。ただし、城跡は深野池の西岸に近くに形成された島に位置していると考えられるため、現在の三箇の集落の地下に埋もれている可能性が高のではないでしょうか。

### おわりに

大東市域の支城を3つを紹介しました。野崎城跡と龍間城跡は山麓から本城である飯盛城跡へ至るルートに位置しています。飯盛城跡はVIII郭（千畳敷郭）南側の虎口に至る尾根に堀切等の防御施設が確認できません。そのため、東高野街道から飯盛城跡の虎口に至るルートに野崎城・龍間城を配置し本城である飯盛城と一体となって南方の防備をになったとみられます。三箇城は考古学的な調査成果がなく、城の正確な位置や構造は明らかにはなっていません。しかし、水運の要衝であり、西側から飯盛城に侵入する際には必ず越えなければいけない深野池に位置することから西側の防衛ラインとして機能したのではないかでしょうか。いずれも本城である飯盛城の近くに築かれて本城の防御拠点として機能したと考えられます。

### 参考文献

- 大東市教育委員会・四條畷市教育委員会編『飯盛城跡総合調査報告書』(2020年)
- 大東市立歴史民俗資料館『三好長慶と大東市の中世』(2022年)
- 城郭談話会編『図解 近畿の城郭II』(2015年)